

人気通販化粧品「ファンケル」気になる創業者「株式売却」の行方

実業界

9

The Analytical Magazine for Economics

創刊60周年

毎月1日発売

昭和27年2月28日第三種郵便物認可
毎月1回1日発行 平成23年9月1日発行 第991号

「武田薬品」

病原菌動物実験の
巨大研究所を
湘南の住宅街に建てた不見識

■野球賭博で社員64人が
書類送検された「キッコーマン」

■またやった「グルーポン」
今度は顧客から提訴され
大ピンチ



「老いてはクスリも手術も効き目は薄く

過日、厚労省が精神疾患をがん、心疾患、脳血管障害、糖尿病の四疾患に加えて「五大疾患」と認定したとの報道があった。

前号のコラムでも述べたように、私やクリニックのスタッフは、日々の臨床で患者さんの口の中に現れるカラダだけではない、ココロが発する「SOS信号」に数多く遭遇しているのでココロの病が、「五大疾病」として認定されたことは、ヤッパリ、という思いが強い。

衝撃的な事だが、最近、精神疾患のためなんと三十九種類もの薬を投薬されている患者が来院した。

薬の飲み合わせ、ということが言われるが、クスリも過ぎれば毒になる」と言われる通り、必要以上にクスリに依存する傾向は良くない。

十 未病の憂い

歯科医が語る現代版養生訓

まず第一にクスリの「効き」が悪くなることがある。

前は少量で効き目があったクスリでも、だんだん量や種類を多く飲まなければならなくなるのだ。

これは、処方する医師サイドの課題でもあるが、投薬によつて、医師が病状を悪化させている、あるいは、新たな病気を作り出していると言われても仕方がない面もある。

方はまだ軽い、という理屈だ。

だが、最近は八十歳を超えた高齢者にも一部を除き、大きな手術をするのは普通になっている。

高齢者の体力が向上したということではなく、体に負担の少ない手術法などが医師たちの努力により研究・開発され、その貢献は小さくない。世の中では、改革・変革との耳にすることが増えた。

国や地域社会が良くなるか、悪くなるかを政治家や役人の責任ばかりに置いて良いものだろうか。欧米では病気の予防のために八割を超えている人が定期的に予防歯科検診を受けているが、日本では一割に満たない。

これ以上、国や地域社会が悪い方向へ向かわないために、国民自らが「予防的」に行動することが、今まさに求められているのではないか。

少しでも悪くなったカラダなら、できるだけ健康を維持していくことは難しいことではない。

カラダも社会も「予防」で健全さが保たれるはずだ。

顎関節症

長栄歯科クリニック
亀井 英志
Kamei Hideshi

ストレスは

見える！

すべては「噛みしめ」が原因だった

気がつくとも「歯を食いしばっている」。そんな「患者予備軍」の読者は、当コラムの亀井医師の著書『すべては「噛みしめ」が原因だった』をお読みいただきたい。「未病」の原因をまとめた良書です。

亀井英志(かめいひでし)

1951年群馬県前橋市生まれ。76年東京歯科大学卒。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。

